

氏名（本籍地）	越後屋 正 行（北海道）		
学位の種類	博士（文学）		
報告・学位記番号	甲第392号（甲文第47号）		
学位記授与の日付	平成28年3月25日		
学位記授与の要件	本学学位規則第3条第1項該当		
学位論文題目	『長部註』（ <i>Sumaṅgalavilāsini</i> ）における源泉資料の研究		
論文審査委員	主査 教授	博士（文学）	渡 辺 章 悟
	副査 教授	博士（文学）	山 口 しのぶ
	副査 准教授	博士（文学）	岩 井 昌 悟
	副査 元本学非常勤講師 / 元愛知学院大学教授 文学博士		森 祖 道

1. 本論文の意義と構造

明治の開国以来、わが国の近代化の国是の中で、欧米先進諸国の学問文化を受容して開始された日本の近代仏教学は、今日では、その欧米を凌ぐほどに成長発展した。その重要な一分野として、パーリ語仏教文献の研究を中心とするパーリ仏教研究・南方上座部仏教研究がある。いうまでもなくパーリ語は南方仏教の聖典語であり、これは初期仏教から現代の東南アジアにいたる仏教伝統を研究するための基礎となる。

現在、わが国を含む世界の学界の、この分野における研究はおよそ次の3つの専攻分野にわたって展開されている。

- (1) パーリ三蔵研究ないしはパーリ三蔵と主として北伝漢訳三蔵との比較研究に基づく、戦前からの原始（初期）仏教研究の継承
- (2) パーリ三蔵に続くパーリ語の三蔵註釈文献（特にその第一次註釈書たるアッタカター文献）の文献学的研究とその翻訳、ひいてはその成果に基づく上座部仏教史およびそれに関連する多様な研究
- (3) パーリ註釈文献とそれに対応する北伝各部派の漢訳諸文献、時には一部の大乗仏教文献との比較研究。これは最近の数十年の間に盛んになった。

上の三大主要専攻分野のうち、当該提出論文は（2）と（3）に属する研究成果であり、これは斯学の国際水準からみても最先端の意欲的な研究であると言えることができよう。

越後屋正行氏の博士学位請求論文『『長部註』（*Sumaṅgalavilāsini*）における源泉資料の研究』は、『長部』に対する注釈書『長部註』が、どのような資料をもとに形成されたのか、そのソースとなる資料について解明しようとした論文である。本論文は、「研究篇」「和訳

篇」「資料篇」の三部からなる。

このうち本論文の主論たる「研究篇」は、上記の(3)に属する研究であり、「和訳篇」と「資料編」は、(2)の翻訳的研究に他ならない。

この中、「和訳篇」は『長部註』(*Sumaṅgalavilāsinī*)の完訳であり、「資料篇」は『長部復註』(*Dīghanikāyaṭṭhā*)の完訳である。まずこれらの二つの文献の全訳は偉業といってよい。なぜなら部分訳は存在しても、全訳は未だ欧米でもなされておらず、英訳さえも存在しなかったからである。パーリ三蔵はすべてが翻訳されているものの、『長部註』は一部の文献が翻訳されているのみであり、『長部復註』は全くと言ってよいほど翻訳が進んでいないのが現状である。このように、越後屋氏によって為された翻訳はいずれも世界初訳となる全訳であって、その功績と多大な努力とは高く評価されるべきである。

2. 資料と研究方法

本論文において主に使用された資料は、5世紀前半のブッダゴーサ(Buddhaghosa)が編纂した『長部註』である。この『長部註』を註釈した資料が、5～6世紀頃のダンマパーラ(dhammapāla)によって編纂された『長部復註』であり、『長部註』に対する付録的な資料として使用されている。そのほかにも、「南伝資料」として、南方上座部大寺派におけるあらゆるパーリ語文献資料も参照されており遺漏はない。

一方、主としてブッダゴーサ以前の漢訳資料、梵文資料、チベット語資料を「北伝資料」と定義し、これらの諸資料も多く参照されている。このように全体として広範囲の資料を扱い、文献学的研究の精度は高められていると評価できよう。

上記のような広範囲の資料を扱った研究方法は、主として事例を積み重ねていく比較文献学と言うべきものである。具体的にはブッダゴーサ以前の北伝資料と『長部註』とを比較検討して、それらに共通する伝承を抽出し、そこに確認された共通する伝承が、『長部註』のソースとなる「古資料」の伝承にもとづくものであると結論づけている。この「古資料」の伝承の事例にもとづいて、『長部』とパーリ三蔵の規定ともたらした意義を考察している。またそこに見られる展開に「古資料」に対するブッダゴーサの註釈の方針を解明しているが、このような比較文献学の方法は、現代の仏教学的研究上において大変有効な手段となっている。この方法によって論述されている本論文は、おおよそ客観的な結論が導き出されていると言えよう。

3. 内容の評価

(1) 概説的评价

本論たる「研究篇」において氏は関連の先行研究を踏まえ、「古資料」を「インドの原始仏教的古層」(古資料の古層)と「スリランカの上座仏教的新層」(古資料の新層)の二

つであると規定し、『長部註』『長部復註』およびブッダゴーサ以前の北伝資料の内容を比較検討している。

まず、先行研究によって指摘されたこととして、註釈 (aṭṭhakathā) 文献 (ここでは『長部註』) には、古層 (古資料) と新層 (編纂者の文章) があって二重構造を有しており、そしてその古層 (ブッダゴーサが『長部註』執筆に際してソースとして用いた、シンハラ語で書かれていて、アヌラダプラのマハー・ヴィハーラ (大寺) に残されていた資料 (シーハラ・アッタカター) にもさらに二層構造が想定される。シーハラ・アッタカターに含まれていた情報には、インド起源の古い情報 (インド的原始仏教的古層 (古資料の古層)) とスリランカ起源の比較的新しい情報 (スリランカの上座仏教的新層 (古資料の新層)) があったと考えられるからである。この先行研究の指摘を受けて、越後屋氏はこのインド的原始仏教的古層 (古資料の古層) の情報を『長部註』から抽出することを試みているのである。

方法論としては、『長部註』と、その作者ブッダゴーサ以前に成立していたことが明確な北伝資料との間に共通する要素を取り出すというものである。この比較検討の手法については概ね先行研究を踏襲しているが、越後屋氏はその際に先行研究で扱われていなかった説話・伝承部分も網羅的に検討するなど、新たな検討資料を提供しているところが評価できる。

(2) 各論的評価

この研究編は全体が A4判で目次10頁、本文258頁の浩瀚な内容と分量を持つが、その中の「本論」は、次の三篇よりなる。

第一篇『『長部註』による『長部』の規定』

第二篇『『長部註』によるパーリ三蔵の定義』

第三篇『『長部註』における古資料の内容』

すなわち、第一篇『『長部註』による『長部』の規定』では、上座部仏教史上、最初に現れ最大の註釈家であったブッダゴーサ (5世紀前半) の著作である『長部註』が註釈対象とした『長部』 (全34経) を、如何に註釈し、注解し、規定したかという問題を、全体で20の事例をとりあげ、それらを三種類に分類して精査し、これを具体的に解明している。

具体的には『長部註』と『仏般泥洹経』等との比較、また『長部復註』における「梵網経」「沙門果経」などの長部諸経典における伝承等を検討している。この検討の結果、筆者は、「古資料の古層」を源泉とするこの規定において、長部経典は異教に対する仏教の優越性を説くことを指摘している。ここにおける検討内容は丁寧で緻密である。

第二篇『『長部註』によるパーリ三蔵の定義』は、三蔵の特質分析の問題において非常に重要な基本概念である「仏の言葉」 (buddhavacana) をキーワードとして、この語の意

味内容を三蔵全体にわたって精査し、パーリ三蔵が「仏の言葉」と一致させられていることを指摘している。この指摘にいたる検討は、従来の見解に対して多くの新しい知見を提示したものである。

第三篇『『長部註』における古資料の内容』は、さらに二つのテーマに分かれる。第一は、今は失われた、「長部註」の主要なる原資料、いわゆる「シーハラソース」の中のインド起源の古い部分、「古資料の古層」の内容的な特徴の解明であって、これは年代的にも対応する現存の北伝諸文献との比較検討によって、初めて可能となる研究である。本論文はこの種の古資料の比較検討の事例を75例という多くを挙げて分析しており、これらの伝承が「古資料の古層」によることを立証した。その際、筆者が特に‘kira’（「伝え聞くところでは」の意）という表現を含む事例に着目し、論を進めている点はユニークであると思われる。この部分は質量共に本論文の中核を成す部分と言えよう。

越後屋氏によって抽出されたこれらの共通要素が、すべて「インド的原始仏教的古層（古資料の古層）」に起源する情報であるかということ、疑わしい点もないではないが、この作業を通して、パーリの『長部』になく、対応する北伝の資料には見出される要素が、かえって『長部註』に存在するというケースがいくつも明るみに出されたことは評価できる。

越後屋氏が試みた註釈文献に関するこのような源泉資料の解明は、パーリ註釈文献の作者（ブッダゴーサ以降の註釈家たち）の著作の真偽問題と共に、註釈文献の文献学的研究の最も重要かつ難解な課題であり、しかも両者は相互に複雑に関連しあっていて、未だ十分な解決に至っていない興味深い緊急のテーマである。本論文はこの非常に大きな今日的課題の一端に取り組み、多少なりとも研究の全体的進捗に貢献しようとした労作であると言える。

次に、第三篇の第二の研究は、ブッダゴーサの経典註釈の方針について、『長部註』の内部を精査し、合計23の事例を挙げて細かく分析した研究であり、これによって『長部註』の有する多くの文献的特色を明らかにしている。

本論にて越後屋氏が着目しているブッダゴーサの聖典註釈の方針・原則であるが、それは、一つの語句に二通りの異なる解説を加えたり、ある語の初出の箇所で註釈せずに後出の箇所ではじめて註釈したり、同じ語句に同じ解説を繰り返したりするものである。越後屋氏はこれらの事例を指摘しつつ、これを古資料（シーハラ・ソース）が未整理であったことに起因すると結論している。このような操作は全和訳を経ての研究であるからこそ指摘できることである。

（3）翻訳部分の評価

さて次には、上記の「研究篇」と共に当該論文の主要部分を構成している「和訳篇」、つまり『『長部註』の全訳と脚注』の部分は、全体で761頁に及ぶ大作であり、そこに記された脚注は実に3841もの多きを数える。この翻訳作業を通して、著者は当該『長部註』

を詳細に読解し、その基礎的努力の上に「研究篇」での研究が初めて可能となったことは言うまでもない点である。

さらに前述したように、「資料篇」は『長部註』に対するさらなる註釈書（ティーカー）、すなわち『長部復註』の全訳である。この訳業も全体で866頁の大作で、脚注は3843に及び、この分量は『長部註』をも上回っている。この復註全訳も世界初訳の労作であり、これに基づいて著者は、当該『長部註』の根拠のある正確な読解を目指したのである。これらはいずれも長部研究の基礎資料として学界に大きく寄与すると考えられ、称賛に値する成果である。

4. 審査の結論

以上のように、越後屋正行氏の博士学位請求論文「『長部註』 (*Sumaṅgalavilāsini*) における源泉資料の研究」は、数々の先端的独創的な知見を開示し、論考、翻訳資料ともに学術的価値を十分に有するものであり、文学研究科（インド哲学仏教学専攻）の博士学位審査基準に照らしても優れた研究であると認められる。よって本審査委員会は、越後屋正行氏の論文を、本学の「博士〔甲〕論文」を授与するに相応しいものと判断する。